



9
70
2段
20行
24字詰

伊原主母の因

道徳と段外の師平朗讀

坪内博士が師平朗讀の名人だつたことは周

知の事實であるが、何時かの新作がせ来ると、

眼介の名を集めて封印りの本讀とされるが

珍ど例とありつておらん。そのころの封印

りの本讀や、挿する、是榮を有びも常末とけがらひのは有

類いことだが、挿する、是榮を有今いも感謝しはる。

→ 相一巻の、挿する、是榮を有あるは、早稲田

文学一、連続的の掲載する、挿する、是榮を有その、そ

(十行廿字) 銀座伊東屋製

9

(1)

の本渡は白く思ふ。明治三十一年
 後、宙外君や畠村松月君と「新書月刊」と
 小文学雑誌を起し、支さぬも而寧ろ福を
 ことちろ、すばまゝ下すのぞ、小楠
 公を返扱つて葉の椿の飾平で
 あり。そのちろ長士の士行しんがまど
 の時代で、一内の見子供はまどとすく
 かの椿とていふ。雙葉がまどとての
 かく脱稿すると潤筆も封印の本渡が
 た。その二葉の椿は句あり。孤城の落月

片桐岩の
行方老 銀座伊東屋製

(4)

いる。の大陸摩つる船吹のり、紙帳が
 巻上つて、仕出しの便所、川に舟が浦の
 娘と尉との出はる。さするで舞臺の
 尺もやうな気が、前後三段の官をえは
 の糸を綴つて、けし、終ど一本の海
 ね。

その次ぎが、つれづれや娘とで、
 卒が、夏つ空、で、音と、
 じ、本文の、吹の、くちり、とえ、せ、み、ま、つ、り、
 ころも、え、え、ら、の、り、九、月、の、十、月、じ、り、
 卒が、夏つ空、で、音と、
 じ、本文の、吹の、くちり、とえ、せ、み、ま、つ、り、
 ころも、え、え、ら、の、り、九、月、の、十、月、じ、り、

この冊

そのり

封の、本、後、み、は

(十行廿字) 銀座 伊東屋製

朝語ほどはやくと引きつけられる。

文藝院会の実情はちねどけど、ちねちねの

と語られどが、官中向く致仕後だじ

端西 ^{ちねちね} 思ひまうし 嵐午まきく暇業 ^で

せんく。ま ~~を~~ ^は ~~を~~ ^は ~~を~~ ^は ~~を~~ ^は

ると不分別な打がまゝ、そなた意味を批評と

最良士が天の志戸の信託は今日の科学で新へ

濃徳 ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い

丁は ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い

新 ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い ~~い~~ ^い

そのあつ、つ銚のつぎ、「初夢」
 公表しりい初よ、平橋のついでに「封印」の本清
 サエ憑りのあつ、つバツらりが、先さの男も平橋
 例の抱月君と吹魔子の問題が起つし、文芸院
 会いは二人を何う処理するのとらふ相談会が
 あつ、つ、つよ、つ二人を脱会させると洋譯一
 歩、つ、つ跡が、えせが前夜、~~生来にがっ~~眠りついで
 の行る「の平橋と両出」を朗読したく。例の
 大木よはさまいんと自然主義の怪物のうぬ

るあゝりあゝ、妹女は族々々々、廣足、その
 廣足を一嶋する行着、あゝは徳々々々、
 リケが寒いやうな思~~い~~、そのあゝ四と一し
 四つふれれ母沢を行着が足殺し、行と徳
 り、同澤し、あゝ足沢富足は、
 っつよ、えさは、
 決心な。

(十行廿字) 銀座伊東屋製

へけるるも、
 しいきわが、
 思ふ。現よその席にじ、
 らうきん。
 つまよ、
 らとは思はらひい、
 う我人じち自中が扱へて又さる。
 此の後よ、
 ちは、
 時の最期「がある。ほら、
 ける刺の糸沢じち三

(十行廿字) 銀座 伊東屋製

あ	い		こ	孫	る	徳	作	い	つ
書	あ	そ	一	孫	が	一	の	。	四
の	る	ん	遍	一	、	は	、	こ	つ
ん	。	は	ち	ん	政	と	そ	の	は
の	。	は	き	と	外	は	の	、	あ
じ	。	は	り	が	ら	は	中	。	る
、	。	は	じ	あ	の	、	封	。	が
そ	。	は	あ	る	の	。	印	。	、
の	。	は	。	。	や	。	り	。	す
仲	。	は	。	。	け	。	の	。	く
外	。	は	。	。	。	。	本	。	り
と	。	は	。	。	。	。	渡	。	り
一	。	は	。	。	。	。	十	。	受
の	。	は	。	。	。	。	一	。	え
は	。	は	。	。	。	。	作	。	こ
は	。	は	。	。	。	。	の	。	ろ
は	。	は	。	。	。	。	文	。	は
は	。	は	。	。	。	。	之	。	。
は	。	は	。	。	。	。	承	。	。
の	。	は	。	。	。	。	の	。	。

(十行廿字) 銀座 伊東屋製

と ま り し も か り の じ よ	が た き 、 終 つ 外 に 士 を 部 つ し 、 函 捕 り	名 的 自 所 作 を 悔 り し し と り し し 、 三 木 君	崎 田 の 東 室 は 、 遊 士 と い ふ 、 何 の 文	す ゝ と 文 の 伊 井 と 新 ん 自 資 本 主 が せ ま し 、 三	つ と 、 そ の り り 三 本 君 は 伊 井 に い き と な り	崎 田 い 、 や く 、 同 後 を 以 て し る が 縁 と な	百 り り り が 、 下 渡 伊 井 が 中 心 の 要 因 に な る	刺 の 受 好 る を 、 新 派 刺 師 は 余 り 殿 下 を 九	令 侯 の 三 本 竹 二 君 で あ り 、 三 本 君 は 歌 葉 侯
--	---	--	--	--	---	--	---	--	---

理外なる士はそれと
は多分の時口を費せられ
執りほどめしつゝは
にらぬ。

い、
内せきそが所はやう
い、
い、

の朗渡は坪内えきのやう
の朗渡は坪内えきのやう
の朗渡は坪内えきのやう

の朗渡は坪内えきのやう
の朗渡は坪内えきのやう

(十行廿字) 銀座伊東屋製

こ	夫	る		て	ら	あ	来	丁
足	が	い	「		士	れ	の	高
さ	お	う	あ		の	と	玉	口
よ	お	う	ま		朗	懐	軍	南
め	ま	ま	ま		読	だ	を	難
	ま	ま	ま		が	い	呼	年
	ま	ま	ま		ろ	し	示	の
	ま	ま	ま		う	は	一	す
	ま	ま	ま		と	は	尺	ど
	ま	ま	ま		、	は	や	ま
	ま	ま	ま		伊	、	一	る
	ま	ま	ま		井	そ	な	前
	ま	ま	ま		は	い	寓	じ
	ま	ま	ま		ま	、	意	、
	ま	ま	ま		ぶ	そ	が	あ
	ま	ま	ま		の	い	替	り
	ま	ま	ま		こ	り	る	作
	ま	ま	ま		を	と	件	め
	ま	ま	ま		前	思	は	は
	ま	ま	ま		ら	い	未	未

(十行廿字) 銀座 伊東屋製

夫の
 浦島太郎の
 伊井はまぶの
 寓意が替り作
 件は未

全く板書の読みかた、さへは昔のさへも

たすは ~~新編~~ 古事記

ら ~~色~~ 白 ~~記~~ は

紫 ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ だ ~~記~~ へ ~~記~~

ら ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

と、ま ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

甫 ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

相 ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

へ ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

瓜 ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

つ ~~記~~ の ~~記~~ は ~~記~~ の ~~記~~ へ ~~記~~

たすは ~~新編~~ 古事記

色

一 何うせ 自命の浦岐を
 と、 渡みよ 穂りし けい、
 は ニ三年 崩じりし 思ふ。 政外
 が 政外 士 作が 政外 士 本
 つりし 細々と 書し 罪を 結ぶ 綴る
 り せ 来し おん 澄ん ぬは 紐 記 帳
 る。 ちや 道途 行 士 の ち 岐 葉 け はん
 と の 作 の せ 本 上 け 政 外 行 士 の ち だ 是 ぎ じ め
 と の 聖 子 じ 両 文 家 だ 同 じ 浦 岐 と 午 だ け じ、

(十行廿字) 銀座伊東屋製

(17)

就のり。馬の残った木の三本君が
 印板りし送ると、坊士は更命の思々他所
 了の副洋を~~送~~れ~~る~~。悟し、再び三本君の介
 へ送るらん。この印板版は目下~~の~~所
 蔵とありて~~る~~が、~~中~~坊士が~~中~~生~~中~~の~~身~~か、
 其自作の関心し~~ら~~ん~~と~~が、~~も~~れ~~る~~す~~し~~思
 中~~ら~~れる。